

副作用回避を目指した CYP データベース薬物相互作用チェックシステムの有用性
○山浦 克典¹, 島田 茉季¹, 中山 典幸¹, 小川 雅教², 野本 禎³, 中野 英治³,
佐藤 洋美¹, 上野 光一¹(¹千葉大院薬, ²メディファーム, ³東日本メディコム)

【目的】CYP データベースは、医薬品の CYP 代謝に関する添付文書情報に基づき薬物相互作用を推測する新規データベースである。今回、医薬品医療機器総合機構 (PMDA) が医薬品適正使用の推進を目的として公開する「副作用が疑われる症例報告に関する情報」を対象に、CYP データベースを用いて回避可能な症例の存在について解析し、副作用防止ツールとしての有用性を検討した。

【方法】2008 年 1~11 月に報告された PMDA 副作用症例報告中、薬物動態において CYP が関与する医薬品を被疑薬とする事例 6,236 件を対象に、年齢、性別、被疑薬名、併用薬名、副作用名を抽出した。さらに、被疑薬と併用薬の組み合わせについて、関与する CYP 分子種および CYP との関与形態 (基質薬、阻害薬、誘導薬) について解析した。

【結果・考察】副作用症例の 23% に併用薬剤が存在した。これら併用薬剤が存在する症例のうち、共通の CYP 分子種が関与する症例は 43% であり、その 4 分の 3 は CYP データベースでのみ検出可能であった。さらに CYP との関与形態について解析したところ、基質薬-基質薬の組合せが 70% と最も多く、次いで基質薬-阻害薬の 18% であり、それ以外の組合せはいずれも 5% 以下であった。また、副作用報告件数が 10 件以上ある医薬品の関与形態を精査したところ、85% (11/13) が基質薬であった。以上の結果、医薬品による副作用の回避には同一 CYP 分子種の基質薬同士の組み合わせについても注意が必要となることや CYP データベースは添付文書情報では回避できないこのような組合せについても回避可能なツールであることを明らかにすることができた。